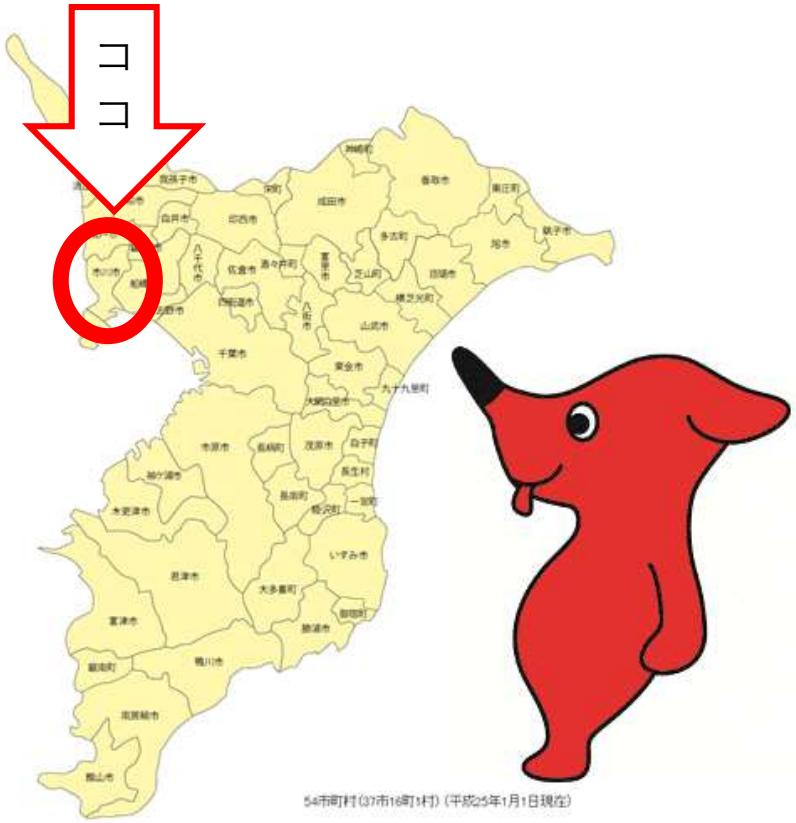
「発達障害支援の地域連携に係る全国合同会議」
2021.2

家庭－教育－福祉の連携の実践について ～ITツールを活用した連携モデル～

市川市立新浜小学校特別支援学級　学年主任　伊勢太惇
児童デイほっと　臨床心理士・公認心理師　外川大希

市川市立新浜小学校について①

市川市立新浜小学校
Ichikawa Municipal Niihama Elementary School
～生涯にわたって学び続ける子どもの育成～
「かしこく　すこやかに」



学校教育目標

生涯にわたって学び続ける子どもの育成

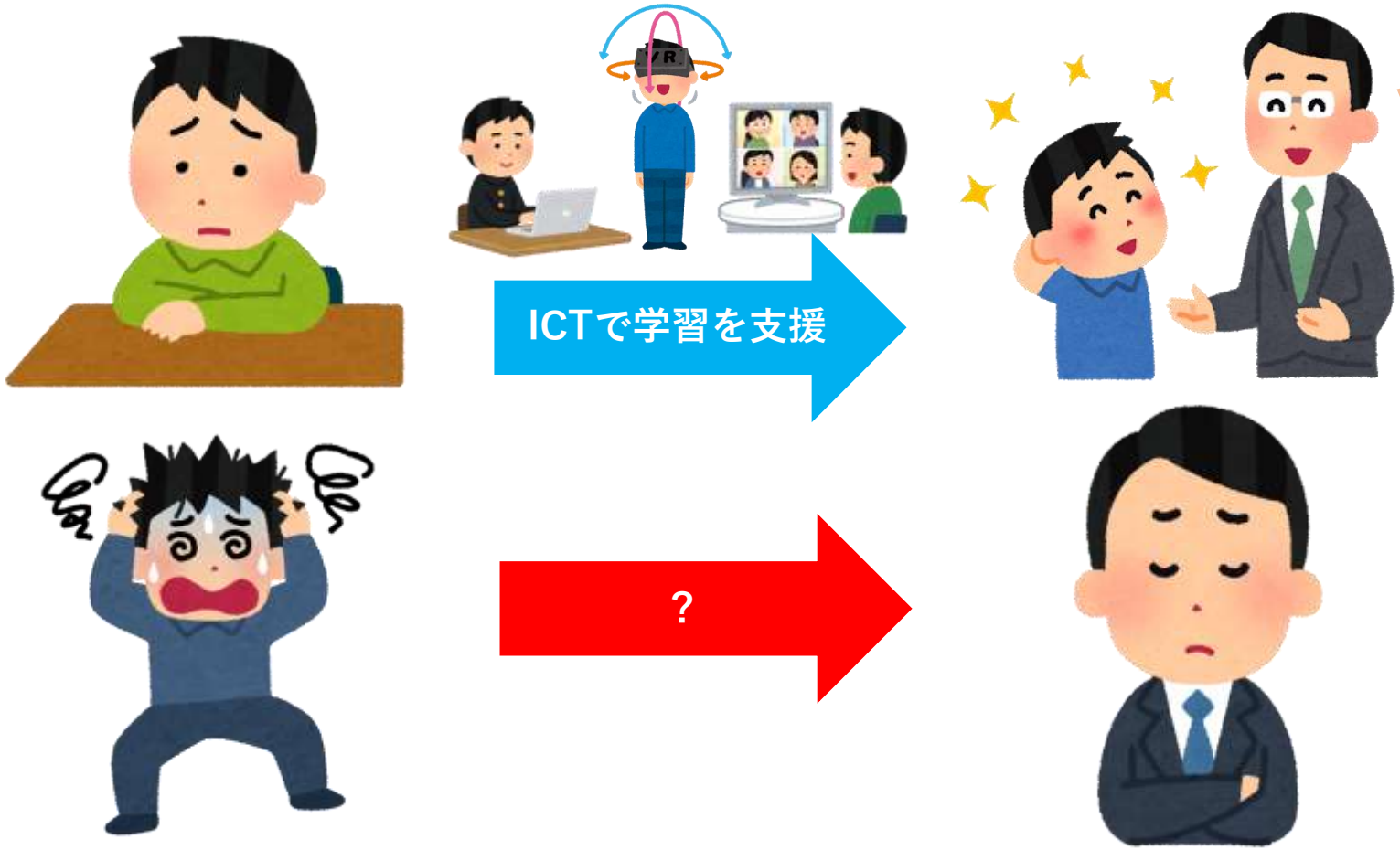
かしこく　すこやかに

学級数

令和2年4月　現在

1年　4クラス	4年　4クラス	かるがも（特別支援学級）	3クラス
2年　4クラス	5年　4クラス	つばさ（通級指導学級）	1クラス
3年　4クラス	6年　4クラス	さくら（日本語指導教室）	1クラス

市川市立新浜小学校について②



特別支援学級（知的）でICTを学習を支援する授業研究を2018年度より実践している。

1　一人一台PCを活用した個別最適化学習

2　コロナウイルスによる休校中で朝の会や映像コンテンツの配信などオンライン対応を実施

3　新しい生活様式が求められる状況下でも継続的に学習機会を確保するためにVRを活用したソーシャルスキルトレーニングの研究

不適応行動における，根拠に基づいた評価・支援が課題

児童デイほっとについて

千葉県市川市にある児童発達支援・放課後等デイサービスの施設

姉妹店に児童発達支援をメインとする「メリーほっと」放課後等デイサービスをメインとする「ほっと塩浜」をはじめとした計5つの事業所からなる**合同会社ニューウェーブ**に属している。
未就学の時期から療育を受け、就学してからもサポートを受けることができることがメリットとして挙げられる。

主に妙典・行徳エリアの18歳までの児童を対象とし、4～5名で構成する**集団療育**・2～3名からなる**ペア療育**・職員と1対1で実施する**個別療育**を展開している。

また、療育の担い手として有資格者である臨床心理士・公認心理師を中心とした専門家による専門職チームが構成され、主な業務は厚生労働省の定める「**放課後等デイサービスガイドライン**」に則り、以下の通りである。

1.利用児童への個別・集団による療育の提供

2.希望者に対し心理職による相談支援・カウンセリングの実施（保護者支援）

3.「Vineland- II 適応行動尺度」による継続的なアセスメントと個別フィードバック

4.児童指導員をはじめとする職員への研修・コンサルテーション

療育及び保護者支援は**応用行動分析学（以下：ABA）**をベースに、**児童中心遊戯療法**の応答技法や**家族療法**のシステム論を活用していることが特徴として挙げられる。

放課後等デイサービスの特色として施設内で物事を完結することが多く、やや閉鎖的な側面もあり、**地域に開かれた事業所作り**や**教育機関との連携の強化**が現在の課題である。

教育と福祉連携の現状

難しさを感じているケースでは

○連携時間の確保
○指導と支援の内容の連携

が課題として挙げられている。

Ⅰ　令和元年度　全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会調査（該当部分）

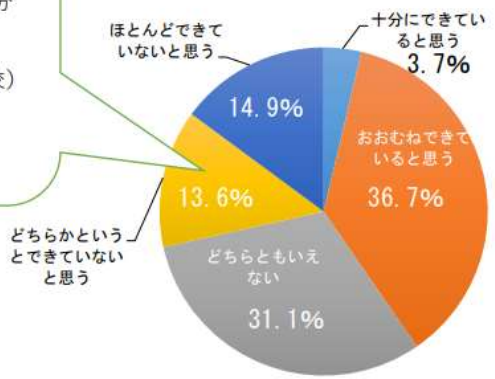
学校と放課後等デイサービスとの連携について

「どちらともいえない」「どちらかというとできていないと思う」
「ほとんどできていないと思う」と回答した理由（複数回答可）（N＝885）

○放課後等デイサービスに通う児童生徒がいないため（379校）
○学校の指導内容と放課後等デイサービスの支援内容等との連携が十分でないため（272校）
○連携する時間が確保できないため（203校）
○子供の状態等について情報交換・引き継ぎが十分でないため（194校）
○放課後等デイサービスについて教職員の理解が深まっていないから（191校）
○連携のための校内組織の整備が十分でないため（152校）
○その他（上記以外）（22校）

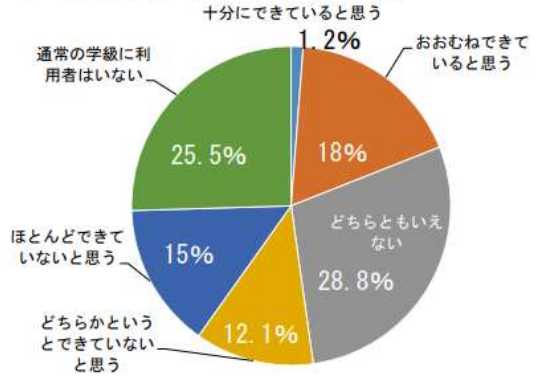
（令和元年7月1日現在　全国会員校地区別約10%抽出）

N:1,485（学校長：小・中学校、義務教育学校）



【特別支援学級と放課後等デイサービスとの連携】

N:1,485（学校長：小・中学校、義務教育学校）



【通常の学級と放課後等デイサービスとの連携】

調査票には、当該部分の外に、①学校について②教職員について③教育課程について④校長自身の教職経験について⑤特別支援学級担任の専門性を高めるための研修について⑥校長の特別支援教育に係る現状と課題について⑦その他、がある

全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会による実態調査報告書（令和２年１月）より引用　-11-

新浜小学校と児童デイほっと
連携の経緯

▼導入期　～保護者を介した書面でのやり取り～

きっかけは児童デイほっとでの心理検査**「Vineland- II 適応行動尺度」**実施時の所見を千葉県市川市新浜小学校特別支援教育在籍の児童（２名）の保護者の方が伊勢教諭に提出したことから始まる。

学校との連携は保護者のニーズでもあり、面談時「一貫した方向性を持った支援を行ってほしい」との発言もあった。

そこからさらに保護者を通して**「個別支援計画書」**や**「特別支援計画書」**の共有が行われ、主に放課後等デイサービス側の見立てや標的行動を教育現場と共有していった。

この連携を通した放課後等デイサービス側のねらいとしては、児童にとって重要な生活基盤の1つでもある「学校」という場で療育や支援の結果獲得した**適応行動の使用頻度や定着度合を確認したい**と考えていた。しかしながら、学校と放課後等デイサービスの業務時間が噛み合わないことや、直接のやり取りができたとしても送迎時の僅かな時間のみという課題を抱えていた。

▼成長期　～ITツールを用いた連携モデルの展開～

伊勢教諭より**ITツール【Slack】**を用いたメッセージベースでのやり取りが提案された。

当該児童個人情報の取り扱いについては保護者には許可を得たうえで、名前を記号化し使用した。

Slackでは以下の流れでやり取りを行っている。

1.学校での様子や課題や困り感の共有

2.上記の情報を受けてのコンサルテーション

3.放課後等デイサービスに於ける療育実施時の様子の共有

このようなプロセスを経たことでねらいや見立てがより共通のものとなり、学校で学んだことを放課後等デイサービスで復習すること、放課後等デイサービスでできていたことを学校で発揮するよう促すことができるようになった。

また、文だけでは伝わりきらない部分の補填や、業務時間の制約上直接のやり取りが難しいことから**【Zoom】**を用いたオンラインミーティングを月に1度実施した。**“顔の見える”関係**の中でABAの観点から有効なプロンプトの使い方等、**コンサルテーション・情報共有**を行った。

本日、ほっとさんの予定ではなかったが、利用予定に変更したことで、朝から落ち着きがない。時間割の曜日を木曜日から水曜に変更しようとする。本人の気持ちを受け止めて、時間は水曜にしたままにし、落ち着いたあたりで元に戻した。

3時間目、タイピング練習。突然雨が降り出し、窓の外を見て不安げ。突然離席する。支援者が横につき、イヤーマフをして過ごす。数分後には落ち着いて練習できた。

さいきん、着席時に靴と靴下を脱いで、正座することが多い。落ち着くのだろう。

返信

外川　大希 5ヶ月前

パターンが変更される形になってしまい、申し訳ありません。

やはり、ある一定のルーティンによって落ち着けるという仮説は濃厚ですね。
本人の気持ちに寄り添うアプローチは非常に有効だと思います。一度受け止める姿勢を見せることが重要だと考えます。

1

○コミュニケーション面
相手の頬を強めにむぎゅっと寄せる等の不適切な気の引き方?遊び?が増えている。

2週に渡って違うこだわりの対象となる児童を見つけ出し、その子と遊びたいと繰り返し発言、固執する様子を見せている(どちらとも歳の近い男児)。その児童達のことは確かに好意的に思っているようではあるが、自分がしたい様にするために関わっているというような感じで相手優位の関わり(気遣いや譲歩)が見られない。
→情緒面の発達や相手を意識する力(ソーシャルスキルの基礎)に課題感が強く感じられた。

○生活場面
公共の場での振る舞いが非常に不適切(手を強く繋いでいないと何処かに1人で駆け出してしまう)であり、夏休みの期間を通して様々な場所へ出掛けることで適応行動を学習していくことの必要性も感じられた。
→環境統制がなされていない分、本人にとっては難しい課題となるかもしれないが…。

○活動場面
本人のこだわり対象となっている男児との2人1組での活動を実施した。ブロックを協力して組み上げる課題や、互いに指定された色を分ける課題では本人発信の協力行動や相手を模倣し、適応的に参加する姿も見ることができた。「こだわり対象であっても、安心した場の中で共に楽しい時間を過ごすことができた」という体験は本人の成長にとってもプラスの効果を生んだのではないかと考えられる。
→本人の適応行動を引き出すには、するべきことを明確にする(逆に言えばそれ以外はできないようにする)ことが非常に重要であることが仮定された。

←↑Slackを用いたメッセージのやり取りの様子の一部。

◇Slackのメリット

隙間時間に日々の成長や変化・困ったことをメモ感覚で落とし込める
見返すことができ、支援の軌跡が確認できる
それぞれのタイミングで余裕のある時に確認できる

→お互いに業務時間の制約があったからこそSlackを活かすことができた

見立てを共有することで、教育－福祉間で共通の**PDCAサイクル**を持ち、その中で支援を提供することに繋がったと考える。

▼成熟期　～家庭－教育－福祉の連携～

教育－福祉間で連携が進んでいく中、保護者へは相談支援等のやり取りを継続的に行っている。これはあくまでも**児童のための“家庭を含めた”の三角連携**であるということを意識してのことである。

被支援者としての保護者であると同時に、**児童の支援者としての保護者**という2つの側面をこちらが意識しながら情報的・情緒的サポートと具体的な関わり方についてのアドバイスとを使い分けることが重要であると考える。

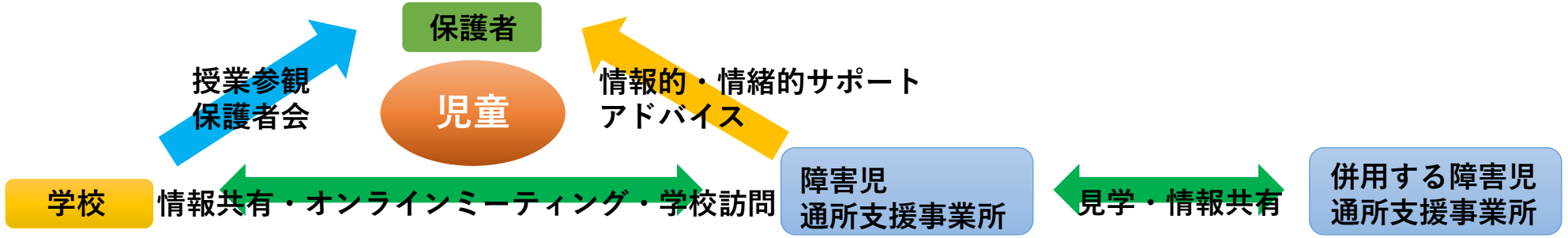
連携を始めて以来、保護者からの信頼感も高まり、**“放課後等デイサービスだから相談できること”**が増えてきたように感じていた。

また、新たな取り組みとして心理学的な視点に基づく学校訪問を月に１度実施している。その際の様子から得られる見立てを各家庭・教職員向けにフィードバックし、

①該当児童がより適応的に授業参加できること

②教職員をはじめとした、他児童とも言語的なコミュニケーションが促進されること

の２点に焦点を当てた。



公開授業の開催へ
～VRゴーグルを用いたSST～

VRを用いたSSTのメリット

◇**「視聴ではなく、体験として」**脳に処理されることから、あくまでも想像で行われるロールプレイに比べて**適切な行動の学習に結び付きやすい**ことが期待される

◇ゴーグルを身につけることで**統制された環境**がすぐに用意される

◇支援者の技術に依存する部分が少なく、**安定してSSTの実施が可能**

◇個人の発達段階によって**課題を選定**することができる

◇リアルな体験を何度も**繰り返し練習**ができる

◇通常であれば、計測の難しい視線のデータを可視化することができ、**リアルタイムで分析**ができる。

①推移の観察→②傾向の把握→③課題抽出→④標的行動の同定→⑤見立ての共有

というプロセスを経て、児童への***より正確なフィードバック***に繋げることができる

SSTを集団で行う場合、基本的には発達・知的水準やコミュニケーション能力をある程度同じレベルで揃える必要がある。そのため介入することのできる時間が短いことや、6歳～18歳という幅広い発達段階の児童が来所するという特徴を持つ放課後等デイサービスでも非常に有効なツールであると考えられる。

VRを用いた授業を実施するにあたって

①ソーシャルスキルの定義付けに関して
ソーシャルスキルを今回の授業に関しては**「対象注視継続時間」**と位置付ける。

②データ収集対象
VRSSTの授業に参加している児童3年生から6年生をコミュニケーション能力高群・低群に分類する

③授業デザイン

介入1. ロールプレイ形式のSST実施
介入2. VRSST実施
介入3. 再度(1)と同様の形式のSST実施

④データ収集の方法
「行動」のデータ収集を行う。具体的には対象児童のロールプレイ時に担当の教職員を注視して発言した時間を測定する。あくまでも「見られている」という感覚は本人の自覚によるものなので、ロールプレイを行う指導者は常に同一とし、他の視覚的な刺激を可能な限り統制するため、服装も同じようなもの着用するよう心掛けた。

⑤仮説
介入1と比較し、介入3の対象注視継続時間の持続が確認された場合、それはVRSSTの効果である可能性がある。
また、介入1の結果が向上した場合、以前の経験が活かされたことにより「般化」が起きていると考えられる。

デジタルとアナログの融合により学習効果を高める

④正のフィードバック
・頑張ったところ
・よくできていたところ
・次回の課題

→感覚刺激と合わせて
伝える（ハイタッチ）

デジタルとアナログを組み合わせることで、場面ごとの学習の機会を担保し、
⑤行動の般化を促進する

一連の取り組みがネット記事・福祉新聞に取り上げられました

福祉新聞

千葉・市川市
特別支援学級

VR活用し実証実験

対人関係スキルに効果

千葉県市川市立新浜小学校の特別支援学級は昨秋から、VR（仮想現実）を活用したソーシャルスキルトレーニングの実証実験を行っている。公立小の特別支援学級でVRの実証実験するのは全国初だ。

同校の特別支援学級によるソーシャルスキルトレーニングは、ロールプレイや絵カードを活用して、周囲の状況を理解する力やコミュニケーションの不安を和らげる訓練を行ってきた。

ただ、現実性が薄く、学習したスキルを日常生活で発揮することが難しい児童が多いことに加え、コロナ禍で学ぶ機会が失われることへの懸念もあった。これらの課題を解決するのに、VRの活用が効果的だとみた特別支援学級学年主任の伊勢太惇教諭が主導して実現させた。

専用のゴーグルを着用すると、学校生活や面接、職場などで想定されるさまざまな場面をVRで疑似体験できる。コンテンツの種類も豊富で、就活の面接や学校での自己紹介など100以上ある。

実証は昨年9月から週1、2回の頻度で行い、内容や進め方は市内の放課後等デイサービスで働く臨床心理士の外川大希さんと話し合って決めている。

具体的には、特別支援学級の3年生以上の16人をコミュニケーションスキルが高いグループと、低いグループの2グループに分け、教室で自己紹介するVRを疑似体験してい

VRを活用したソーシャルスキルトレーニングの様子

もっと地域とつながることを目指して

地域への発信

▼Facebook

▼Note

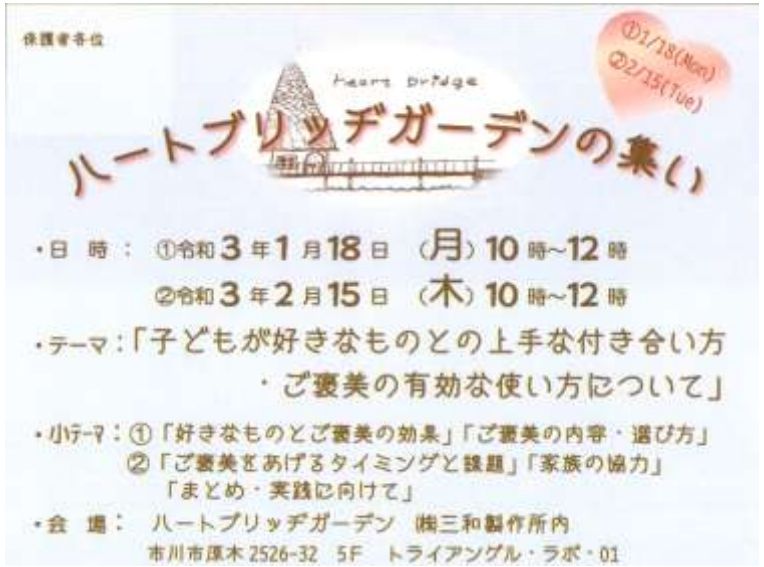
▼Twitter

で継続的に発信中

地域との連携

千葉県市川市の企業である**株式会社三和製作所**様との連携し、現在は市川市の特別支援学級に通われる保護者を対象に“子育て支援や子どもとの有効な関わり方について”**ペアレントトレーニング**や**ABA**の視点を基に講演・交流会を実施しています。

家庭－教育－福祉という三角連携に**“地域”**からのバックアップが加わることで、障害を抱える人がより生活しやすい未来を創ることに繋がると考えています。



参考・関連資料

放課後デイサービスガイドライン

https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000082829.pdf

Vineland- II 適応行動尺度

https://www.nichibun.co.jp/kensa/detail/vineland2.html

文部科学省　教育と福祉の連携について

https://www.mext.go.jp/content/20200902-mxt_tokubetu01-000009703_3_1.pdf

Slack

https://slack.com/intl/ja-jp/

Zoom

https://zoom.us/jp-jp/meetings.html

兵庫県教育委員会　－学校と放課後デイサービス事業所の連携マニュアル（案）－

https://www.hyogo-c.ed.jp/~sho-bo/day%20service%20renkei/renkei%20manual.pdf

参考・関連資料②

障害者福祉と学校教育の連携　－放課後デイサービスに焦点を当てて－
http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/sh18020406.pdf
放課後等デイサービス事業所と学校との連携の実態に関する調査研究
https://www.juen.ac.jp/handi/linkfiles/syuronyoushi/H27/H27_16.pdf
豊中市議会議員　今村正氏　学校現場と放課後等デイサービス事業所の連携について
https://www.komei.or.jp/km/toyonaka-imamura-tadashi/2018/12/21/5538/
株式会社ジョリーグッド様
https://jollygood.co.jp/
株式会社三和製作所様　ハートブリッヂガーデン
https://heartbridge.jp/garden.html
市川市新浜小学校
https://ichikawa-school.ed.jp/niihama-sho/
児童デイほっと
http://hot-associate.jp/jidohot.html